

ブレイディみかこ『子どもたちの階級闘争
ブローケン・ブリテンの無料託児所から』みすず書房（2017年）

イギリス、ブライトン在住の保育士である著者は、「底辺託児所」と名付けられた無料託児所で働き、そして、現在の保守党政権下において緊縮政策で公的資金援助を断られたその場所を「緊縮託児所」と名付けた。本書の前半部は2015年から2016年の「緊縮託児所」の閉鎖まで、後半部は2008年から2010年に著者が「底辺託児所」を離れる時点まで遡る。ふたつの同じ託児所は政治の力によって大きく変形し、最後は存在すらなくなってしまう。その間、同じ場所で新たな子どもを迎え、その成長とともに送りだしてきた保育士の視点は、地べたに生じた変化からあらわれた社会の相貌を描き出している。著者の立ち位置ははっきりしている。「政治が変わると社会がどう変わるかは、最も低い場所を見るとよくわかる」。

サッチャー以降の新自由主義政策で労働力の流動化が生じた後に、ブレア労働党政権下の非就労者に対する手厚い生活保護政策は「アンダークラス」を生むことになった。生活保護に依存しながら勤労に対して怠慢な態度を見せていたことも相まって、彼らに対する社会的な反発は広く根深くなっていた。同時に、幼児教育についても階級分離は進んでいた。ミドルクラスの親たちは自分の子どもたちをアンダークラスの子どもと同じ施設に入園させることを拒み、アンダークラス出身の保育士に対しても不満を向けた。また、エリアごとの小学校区では、貧富による居住地域の分離が進んだ。結果的に子どもたちは、自分と異なる階級との交わりをほとんど経ないまま社会の成員に、つまり彼らの所属していた階級に属しているのだった。著者の働き始めた「底辺託児所」は、一定の収入が確保できず“ミドルクラス家庭の御用達施設”と呼ばれる英国の保育園に入園させることができない人びとの子どもを無料で預かる、複合的教育センターの一部だった。集まる主な利用者は、自らの意志でミドルクラスから脱落してヴォランティア活動に専念するアナキストや、公営住宅に住み生活保護をうけて暮らしている、いわゆるミドルクラスから「チャヴ*」とよばれる人びと、そして言語が通じず仕事が見つけられない外国人たちがいた。著者が「緊縮託児所」に戻ったとき、緊縮政策によって生活保護が打ち切られた後には、アナキストや「チャヴ」とよばれる人びとはセンターから姿を消していた。社会復帰をとげて生計を成り立たせることができたケースがある一方で、かれらのなかには身動きがとれず閉ざされた空間に孤立させられた家族、実際に子どもを福祉施設に引き取られた親もいた。そして託児所はフードバンクへ変貌し、「アンダークラス」の子どもが学ぶ場そのものは押しやられていった。

ここに登場する、多くの子どもたちの人格形成や関係性の築き方において、親の経験や考え方、言葉遣いへ依拠している部分はとても大きい。家族のふるまいをそのまま再現する形で、他人に対して差別的な言動を振りまくこともある。しかし、本著で繰り返し描かれていたのは、そうした子どもたちが他者に触れ合うことで、家族や親から受け取った経験を中和させていくような姿だった。ではもしそうした機会が失われたときに、その子どもたちに対して、他者に寛容であることの正しさ、暮らしのために勤勉に働くことの正しさを説く（アッパークラス、学者や政治家たちの、時に憎悪さえ混じり、もしくは同情に満ちた）言葉が聞き入られることがあるだろうか。

著者は、現状を乗り越えようとする子どもたちの軽やかな自然の抵抗力や無垢な子どもの存在に、無条件に希望を託しているのではないだろう。同時にその視線や筆致からは、誰かを糾弾する拙速さも正しさがどこにあるのかを誇示しようとする安易さもない。底辺託児所が緊縮託児所へ、最後にはフードバンクへ変わっていき、そこで大人たちが長い列を並んで待ち望んだ食料を手にして嗚咽している、このような姿を子どもの代わりに見ている。そこは、「尊厳」もなくなった「最も低い場所」のひとつである。著者はここに、見知らぬ他者へ読者の想像力が届く点をマークしている。（長谷川 翼）

*「チャヴ」については、本著と同時期に出版されたオーウェン・ジョーンズ著（依田卓巳訳）『チャヴ 弱者を敵視する社会』海と月社（2017年）を参考されたい。およそ、スポーツウエアを身にまとい、公営住宅に住み、粗野な態度をみせる若者たち、というイメージをステレオタイプ化した言葉。